江南文三さんの思い出

川副国基

時が経つにつれていよいよその印象が忘れがたいものになっていくなつかしい人たちがある。江南文三さんもそういうひとのひとりである。

十年ばかり前に、ある文学講座の月報に、わたしは原稿用紙三枚ほどの江南さんの紹介をしたことがある。いまここでその文章を補足しながらはじめての資料を加えて新しい一文としてみたい。

江南文三さんは雑誌「スバル」の発行人だった。「スバル」は人も知る通り、雑誌「明星」廃刊のあと、森鷗外を頭領とした反自然主義の耽美的傾向を強く見せた雑誌で、同じ傾向の「三田文学」とともに一時期重きをなした。明治四十二年一月から大正二年十二月まで通巻六十冊を世に送ったが、発行人にははじめの一年は石川啄木があたり、つぎの年から終刊まではずっと江南さんがあたった。名編集人といわれた。与謝野寛・晶子夫妻や森鷗外にかわいがられた江南さんは、郷里金沢の旧制第四高等学校から東大の英文科に学んだ文学青年で詩を書き歌を詠み「スバル」には数編の小説もある。小説よりも詩や歌の方がうまかったようだ。

その十七歳のときの作に「をとめぐさ」という詩がある。

はねつるべ。とりの声。
夜はあけぬ。里白く
もやこめて、たわたわに
露多き湿り香や。
花咲くよ。籬根みち。
朝顔は葉がくれて
つつましく童女さび、
百合のみはあてはかに
すくすくと大人びぬ。
あぢさゐのえうらくは
朝の眼にいさぎよし。
また咲くは月見ぐさ。
そよ風に浮ぶごと
ゆれゆれてほの黄なり。
垣根みち。人は今
おぼろなる夢ごこち。
もや過ぎぬ。しろがねの
あげばりの内すきて
見えがくれ、また咲くよ。
ひともとのをとめぐさ。
茎長き黒髪に、
まろぬかの花びらや。
まなざしの光る蕋。
くちびるの紅の蕋。
深ぶちの水色に
ひた染めし大き葉や。
さやかにもうるはしき
夢なればあくがれぬ。
ひともとのをとめぐさ。
朝もやの香のなかに。

わたしのところでまだ十八歳のときの詩と十九歳のときの詩とが二編ずつわかっているが、とにかく早熟の詩人であったといえよう。ひとつ年上の啄木の同じ年ごろの詩と比べて優劣は感じられない。しかし、独創というよりも当時の泣菫や有明の詩からの影響が強いようだ。

無名時代の同郷人室生犀星は金沢から上京して江南さんをたずね、冷たい扱いをうけたが、その詩をみとめてくれた感謝を自伝的作品「弄獅子」のなかに記している。犀星の詩は明治四十三年二月の「スバル」に江南さんの散文と並んで「尼寺の記憶」がはじめて載っているようだ。作家の江口渙は江南さんにつれられてはじめて高村光太郎夫妻をたずねたことをその「わが文学半生記」(昭和二十八年・青木書店刊)に記している。

わたしが東京府立一中(現在の日比谷高校)の教員室ではじめて江南さんに逢った昭和十二年といえば、江南さんはちょうど五十歳だったわけだ。感性がゆたかで図画の写生に使う大根の、青い葉っぱの間に赤いチョークを添えて色の配合の美しさに眺め入るといったところがあった。日本語の語感が天才的に鋭く「わっしはね、英語で日本語を教えてるんですよ」と語感に鈍い、専門の国語教師に対して腹立たしそうであった。昭和十年代に入って宮沢賢治がはじめてひろく紹介されたころ、わたしが示した松田甚次郎編「宮沢賢治名作選」(昭和十四年、羽田書店刊)をパラパラめくっていた江南さんは突然どこかへ姿を消したかと思うとしばらくして口ひげの生えた顔を紅潮させて戻ってきて「えらい詩人があったものですね」といった。江南さんは音楽室で、譜入りの賢治の「精神歌」や「イギリス海岸の歌」を奏でてきたのだった。なお、作曲家の中山晋平さんは江南さんの義弟であった。

わたしは江南さんと「石川啄木」という映画を見にいって「啄木って、気障ないやな奴でしたね」といったはなしを聞いたり、四谷の「みさご寿司」に同僚の高田瑞穂君とつれていってもらって「鷗外さんはいつも葉巻くさかったな」というはなしを聞いたりした。「鼻の文三」と佐藤春夫によばれたやや大きな鼻が柔和な眼と不思議に調和した上品な顔だった。佐渡中学校の英語教師時代の江南さんをたずねた与謝野晶子に「佐渡に住む文三の君は絵のみかく八雲御抄のたぐひなるべし」という歌があるがこの歌の意味はいまもってわたしにはよくわからない。

奇人、変人といわれてきた江南さんも、母堂がなくなってからはその供養だといって法華経を口語詩ふうに訳して「日本語の法華経」(昭和十九年、大成出版刊、再刊が数年前にも出た)というのを出版された。友人高村光太郎のいい序文がついている。

江南さんは三流どころの文人で終ったかもしれないが、明治末から大正にかけての自由主義的な文人の本質がどこかに強い心棒になっていたと思う。江南さんが戦時下にわたしに示した歌につぎのようなものがある。

腰にせる弁当がらはからからと鳴れども
心軽からぬかな

明治二十年生まれの江南さんは昭和二十一年二月八日、戦後の紛雑した世相のなかでなくなった。